

---

# **;インフィニット・ストラトス> ~ Story of black knight ~**

暇人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS >インフィニット・ストラトス< Story of black knight

### 【Nコード】

N3778T

### 【作者名】

暇人

### 【あらすじ】

織斑 一夏には天才的な双子の兄がいた。だが兄は小学校卒業の日を境にして姿を消してしまった。それから3年余りの時が過ぎ、一夏がIS学園に入学した時、二人は再会を果たすのであった。この物語はそこから始まる・・・IS<インフィニット・ストラトス>の二次創作です。処女作なので文才もなく、矛盾も多々あると思います。楽しんで読んで頂ければ幸いです。あと内容がkabutteたら申し訳ありませんm(\_\_\_\_\_)m

## プロローグ

「朝か・・・・・・・・」

まだ日が昇り始めたばかりの時間に目を覚まし、そう呟いてから俺は自分の左右を見回す。

右には20代の女性が左には自分と同年代少女が寄り添うようにして寝ていた。

「またか・・・・・・・・」

そうまたなのである、だが1年以上も毎日同じことを繰り返せば感覚が麻痺してくるのか、それ以上大きなアクションをすることもなく二人を起こさないようにして俺は起き上がりタオルと竹刀を片手に外に出て朝の日課を開始した。

「996・・・・997・・・・998・・・・999・・・・千っ！！！」

千本の素振りを終えて汗を軽く拭き、次に俺は朝食を作るべく台所へ向かった。

朝食ができる時間に合わせたかのように二人は起きてきた。

「おはよう、れくん」

「おはよう、零夜」

「ああ、おはよう

束姉、イブ」

二人に笑顔で朝の挨拶を交わし、俺たちは席に着いた。

「いただきます」

「「頂きます」」

束姉は行儀悪く、イブは行儀良く食べていく、そんな光景を見ながらこれでは、どちらが年上かわからないと笑みを浮かべながらふと実姉と実弟のことを思い浮かべた。

「あれから3年か・・・」

理由あって俺は3年前、姉弟の前から何も云わず突然姿を消した。巻き込まないようにする為とはいえ、今更ながら酷い事をしたものだと思いを馳せていた。

ふと箸を咥えながらテレビを見ていた束姉が騒ぎ出した。

「れくん！れくん！！」

「ん、何？束姉？」

回想の海に潜ろうとした所を引っ張り揚げられた為、そっけない返

事をしてしまう。

「たいへん！、たいへんだよー！！」

「だから何が？」

「いつくんがテレビにでてるー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ！？」

束姉の言葉に驚きながらテレビを見て固まってしまった。そこには3年ぶりに見た弟が引き攣った表情で映っていた。

「えっ！？それじゃあ今映っているこの男の子が、零夜が話していた弟なの？」

イブが驚きながらも俺に確かめてきたが、俺は画面端の文章を見て驚愕していた。その文章はこう書かれていた  
『ISを動かせる男子現れる！！』と

（一夏がISを動かしただって！！？）

「これは、おもしろいことになったねえー。世界中が動き出すよ  
おー」

まるで、おもしろくて仕方ないように言う束姉の言葉に僕は答えられなかった。

世界中が動く      きっとその影で再び『奴等』が蠢きだすであろっことを俺はどこか予感していたから。



## 第1話 再会する3人

『IS』、正式名称『インフィニット・ストラトス』宇宙空間での活動想定して作られたマルチフォーム・スーツである。10年前に開発されたそれは、現代兵器を圧倒的に上回るスペック持っていた為、『兵器』としての可能性を見出された。その後各国の思惑から現在は『スポーツ』という形をとっている。ISには大きな特徴として基本的には『女性にしか』動かせない。そしてIS学園は、IS操縦者育成を目的とした教育機関である。所謂『女子高』、『女の園』である。

IS学園ゲート前、そこに本来は在りえない筈の男子用制服を着た黒髪の少年と制服を着た銀髪の少女が立っていた。

「ここに来るのも『1年ぶりか』あの時はまさか、ここに学生として通うとは夢にも思わなかったな、なあ、イブ？」

少年は、隣に立つ少女に同意を求めた。

「そうね、あの時の私たちの立場からは考えられないわよね。まあそれも零夜の弟がISを動かしちゃったもんねえ」

少女は苦笑い混じりに応えた。

「愚弟のせいでごめんな」

2ヶ月前、一夏がISを動かしたというニュースが報道されてから、すぐに一夏が身柄の一時的な保護の為、IS学園に入学させられると予測が出来た。それに対して俺はどういう行動を取ればいいか考え、悩んだ末、入学することを決意した。

余談だが、それを聞いた時の束姉の拗ねっぷりが半端じゃなかった。その約1ヶ月後、どうしても一緒に行くといって聞かないイブと共に入学試験を受ける為、3年ぶりに『あの人』に会いに行った。

入試で殺されるかと思った。

この時も束姉が『なら自分も学園に行くと』無茶を言い出したのを宥めるのが大変だった。

そして色々準備があつた為、入学式には参加できず、ここで『あの人』を待っていた。

「すまない、会議が長くなって待たせてしまったな」

『あの人』、千冬姉はそう言いながら歩いてきた。

「いや、いいよ。どうせ会議が長引いたのも、俺や一夏絡みのせいだろ千冬り、いや、織斑先生かな？」

と俺は少しいたずらっぽい笑みを浮かべながら言った。

「ふっ、まったくお前は相変わらずそういう所は鋭いのだな」

千冬姉は苦笑いを浮かべながらどこか呆れたように言うと、俺の隣



に立つイブに声を掛けた。

「イブもよく来たな、歓迎する」

「ありがとうございます。あのところで私たちのクラス割りはどうなりましたか？」

「ああ、お前たち二人は事情が事情なのでな、一夏と同じ1組に私が捻じ込んだ。ちなみに担任は私だ」

「そういえば箒もここに通うって束姉に聞いたんだけど、どのクラスなんだ？」

「ああ、あいつもお前たち同じ1組だ」

「そっかあ、箒に会うのも6年ぶりかあ……うん？どうしたんだイブ？」

ふと隣に立つイブを見ると、どこか怒っているような不満そうな顔をしていた。

「知らないっ！！」

ふいつと横を向くイブに対して、俺が首を傾げていると、千冬姉がくくくつと笑みを浮かべながら言った。

「そっち方面は相変わらずか、イブも苦勞しているようだな、だがこれからも大変だぞ、あれの妹も強敵だからな」

「はあ~~~~~」

千冬姉の言葉に対して深いため息をついた、本当にどうしたんだろ  
う？

「さて時間も押している、話はこれぐらいして、案内するでしょう  
か、二人ともついてこい」

「「はいっ」「」

颯爽と歩いていく千冬姉の後を俺たちはついていった。

「では、私が呼んだら入ってこい」

そう言い残し千冬姉は教室に入ってきた、俺たち二人は廊下に残され  
た。

「ねえ零夜？」

「うん？なに？」

「零夜の弟ってどんな感じなの？」

「うーん、そうだなあ、なんて言えばいいかなあ」

イブの問いにどう応えたものかと考えていたら、教室の方から俺と  
よく似た声が聞こえてきた。

『げえっ、関羽！？』

『誰が三国志の武将だ、馬鹿者！！！』

パンツと廊下にまで大きい音が響いてきた。

「……………」

「えーっと、零夜、今のつてまさか？」

苦笑いを浮かべながらイブが聞いてきた。

「……ああ、今のは間違いなく一夏だ」

俺は少し呆れながらもイブに応えた。

「そうなんだ……………」

ああ、今のできつとイブの中で『織斑一夏』おバカな子』とインプットされたんだろうなあと思った。

『それではHRを終わりにする……………と言いたいが、事情があつて式に出れなかった奴が二人いてな……………入ってこい』

「失礼します」

「では、二人とも自己紹介しろ」

「じゃあ、私から先にするね？」

「ああ、わかった」

イブが一步前に出て背筋をピシッと伸ばしながら教室全体を眺めた。

「イブ」エデンです。趣味は読書です。皆さんこれから1年間よろしく願います」

簡潔に綺麗にまとめたイブの自己紹介に対して俺は周りの反応を見てもみた。

（イブは『学校』に通うなんてはじめての経験だからな、俺がフオローしないとな。）

『綺麗な人ねえ……………』

『お人形さんみたい……………』

『お持ち帰りしたい……………』

とまあ主にイブの容姿に対しての反応が多かったが好意的に受け入れて貰えたようで安心した、最後のはまあ聞かなかったことにしよう。うん、そうしよう。

静かに騒ぐ生徒たちに対して千冬姉は手を叩き静めさせた

「静かにしろ！！……………次、挨拶しろ」

「織斑零夜です、これから1年よろしく……………ニコッ」

「「「「「ズキューー」」」」」

どこからかそんな効果音が聞こえてきた気がした。そして一瞬の静寂の後

「「「「「キャアー」」」」」ツツツツツ！！！！！」」」」」

窓ガラスが割れるんじゃないかと思ってしまっただけの大音響が響いた。

『何あの人！？凄く格好いい！！』

『お父さん、お母さん、私を産んでくれてありがとう！！』

『おりむゝとは似てながらどこか違う魅力を感じるねゝ』

『「「「「「………」」」」」織斑君？』」」」」

騒いでいた女の子たちが目をぱちくりさせながら質問してきた。

「ああ、俺も織斑先生の弟で一夏の双子の兄だ」

俺の一言でまた教室中が騒ぎ出したが、俺は入ってきた時に見つけていた。3年ぶりに会う弟と6年ぶりに会う幼馴染に再会の言葉を告げた。

「ただいま、一夏。そして、久しぶり、箒。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3778t/>

---

IS &lt;インフィニット・ストラトス&gt; ~ Story of black knight ~

2011年10月9日03時36分発行